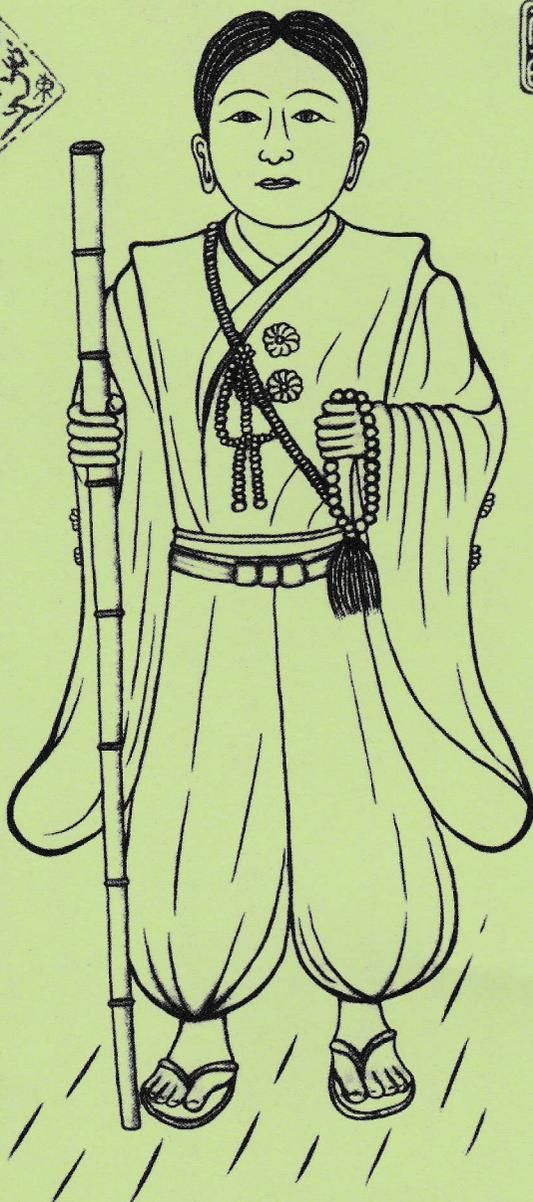


# みおしえ



法然上人旅立ちのお姿



市川陽山謹画



平成23年には法然上人の八百年御忌をお迎えします。

埼玉教区浄土宗青年会

<http://www.saijousei.com>

つゆみ  
露の身は

こころかしくこにて 消えぬとも

こころ  
心はおなじ 花の台ぞ

— 法然上人御作 —



《意味》

私たちの命は、葉の上に宿る朝露のようにはかなく、すぐに消えてしまうものです。しかし、お念仏をおとなえただいていれば、阿弥陀さまのお浄土に咲く大きな蓮華の上に生まれることができます。いつか共にお浄土で再びお会いし、『阿弥陀経』に説かれる俱会一処(くえいっしょ)〔極楽浄土で再び会うこと〕の喜びを分かち合いまししょう。

今年に入ってから、秋川雅史氏が歌う『千の風になって』が流行しています。皆さんも一度は耳にしたことがあるでしょう。

この世を去った後も、風になってあなたの近くにいますよ。と  
いった意味を持つ歌ですが、興味深い歌だと思えます。

この歌が広く受け入れられたわけは、おそらく、人々の心の中に、亡くなった家族や友人がどこかに存在していてほしい、そして「もう一度会いたい」という願いがあからななのでしょう。

この願いを受け止められる歌が法然上人の御歌の中にあります。冒頭に掲げました『露の身はく』の御歌です。

この御歌は法然上人が七十五歳の時に詠まれたものです。

当時、法然上人の説くお念仏の教えが広まるとともに、様々な問題が起こってきました。そのような状況の中で、弟子の起こした出来事が後鳥羽上皇の怒りにふれ、その責任をとるために、法然上人は四国へ流罪にされています。過酷な四国への旅が、当時としては高齢であった上人の命を奪ってしまうかもしれせん。法然上人の弟子のひとり、一度は関白という地位にまでなった九条兼実公(くじょうかねざねこう)が法然上人の身を案じ、旅立つ前の上人に歌を贈ります。

「振り捨てて ゆくは別れの はしなれど

ふみわたすべき ことをしぞ思ふ」

（慕われながらも、その者たちを振り捨てて旅立たねばならぬ上人の何とお気の毒なことでしょう。今が別れのはじめですが、悲しみに堪え、上人へはお慰めする手紙を書き続け、後鳥羽上皇へは、許しの日が来るように橋渡しをつづけましょう。しかし本当は、今すぐにでも上人を追いかけて参りたいのです。）

このように詠み、この別れが永遠の別れになるかもしれないと、胸を痛めている兼実公に対して、法然上人は冒頭の『露の身はく』の御歌を返歌として贈られたのです。「お念仏をとなえる我々を阿弥陀さまは必ず救いとってくださいますから、お浄土でまたお会いしましょう。」と、兼実公に伝えているのです。

これらの歌を贈り合った数週間後に、兼実公は五十九歳でこの世を去り、その後すぐに法然上人の処分は不当であると認められ、上皇に許されます。八十歳の時に法然上人は京都に戻りますが、お二人が再び生きて会うことは出来ませんでした。

しかし、法然上人は、兼実公とのお浄土での再会を確信していたことでしょう。また、兼実公も同じ気持ちだったと思います。

法然上人は、長い年月の厳しいご修行の中、様々な經典を読み、

「お念仏」をおとなえして阿弥陀さまの西方極楽浄土へ往生することが、人々が救われる唯一の道だと確信されました。そして、お浄土に往生させていただいた時には、先に旅立たれた「大切な方との再会」が叶えられるのであると、お示しくできました。ですから、法然上人自身、兼実公との別れの際に「さようなら」ではなく、「また会いましょう」という意味を込めた御歌を贈っておられるのです。「心はおなじ 花のうてなぞ」との御歌の結びからは、お念仏をおとなえする者同士、永遠の別れではない、この世を去った後には、阿弥陀さまにお浄土へ往生させていただき、またそこで会えるのですよ、という、法然上人のやさしいお気持ちが伝わってきます。

命が終わるときに、「また会いましょう」「お浄土で待っていますよ」と言って親しい人と別れられることは、尊く有難いことだと思いませんか。お浄土での再会が叶うことは、「南無阿弥陀仏」をおとなえする私たちだけが得られる、この上ない喜びのひとつなのです。



執筆 浄泉寺 峯山篤雄  
文責 埼浄青編集委員会

# 表紙（法然上人旅立ちのお姿）解説

法然上人が幼名の勢至丸を名乗っていた頃の出来事です。

美作国久米南条稻岡庄（現在の岡山県久米南町）に生まれた勢至丸が九歳の時、父親の時国が夜討ちにあい重傷を負ってしまいます。父は勢至丸に向かって、仇討ちを強くいませ、自分の死後を弔い、迷いを離れて救われる道を求めることを遺言し、息を引き取りました。

父の死によって、母親とも別れて、叔父にあたる菩提寺（岡山県奈義町）の観覚上人の元に引き取られた勢至丸は、仏教の手ほどきを受けることとなります。それから数年の間、勢至丸を見守り続けた観覚上人は、その非凡な才能を見抜いて比叡山で学ばせることを決心します。勢至丸が十五歳の時でした。比叡山で学ぶ、ということとは故郷の母とも長い別れになることを意味します。

表紙絵は、悲しむ母を心から慰め、自分の決意を告げて比叡山へ向かうその時のお姿です。

なお法然上人（勢至丸）の比叡山への入山は十三歳と十五歳の両説があります。

参考文献：『法然上人行状絵図』・『ひとりも捨てず』石上善広監修

## 法然上人略年表

- 一一三三（長承二） 1才 四月七日、美作国（岡山県）にて、ご生誕。幼名 勢至丸。
- 一一四一（永治元） 9才 父、漆間時国、明石定明の夜討ちにあい、死去。叔父・観覚の居る菩提寺に身を寄せる。
- 一一四七（久安三） 15才 比叡山に登り、源光に師事。皇田のもとで出家、受戒。
- 一一五〇（久安六） 18才 西塔黒谷に隠遁し、叡空の門に入る。法然房源空となる。
- 一一五八（保元元） 24才 嵯峨の清涼寺に参籠。その後、南都の学匠を尋ねる。
- 一一七五（承安五） 43才 立教開宗（専修念仏に帰入する）
- 一一九七（建久八） 65才 一祖・聖光房并長、門下に入る。
- 一一九八（建久九） 66才 『選択本願念仏集』を選述。
- 一二二二（建暦二） 80才 一月二十三日、『一枚起請文』を記す。  
一月二十五日、御往生。



発行 埼玉教区浄土宗青年会 長 吉田真典

編集委員長 押野見孝道